

『古今六帖』による規範化の一樣相

——「卯の花」歌を例として——

高 木 和 子

平安朝の歳時意識、とりわけ『古今集』に規範化された歳時意識は、今日まで残る四季観の源流とされるのが通説的だが、『古今集』は成立と同時に正典となったのではなく、『伊勢物語』や『源氏物語』といった新たな正典に受容されることを通じて、その規範性を確立していったと考えられる。その際に、『古今集』成立から『源氏物語』成立までの間の重要な契機、すなわち『古今六帖』は、いかに『古今集』の規範化の生成に参与したのだろうか。本稿では「卯の花」の歌を例にとって、『古今集』正典化の過程における『古今六帖』による規範化の一樣相を確かめるところにする。

一 『古今六帖』の「卯の花」歌

十世紀後半に作られたとされる『古今六帖』には、『万葉集』から『古今集』『後撰集』あたりまでの約四千五百首の和歌が、四季の風物・動植物・人事などの題のもとに分類され収められている。そもそもは作歌のための手引書で

あつたようだが、その次元にとどまらず、平安朝の諸作品の形成に大きな影響をもたらしている。

『古今六帖』第一の歳時の題を一覧すると、「春立日・親月・元日・残雪・子日・若菜・白馬・仲春・弥生・三日・暮春・初夏・更衣・卯月・卯花・神祭・早苗月・五日・菖蒲・皆尽月・祓・夏尽・秋立日・早秋・七夕・後朝・葉月・十五夜・駒牽・長月・九日・秋尽・初冬・無神月・霜月・神楽・師馳月・仏名・潤月・歳暮」となっている。総じて暦や行事に直接関連した題である中で、やや異色なものとして目にとまるのは、自然景物の「残雪」「若菜」「卯花」「菖蒲」、及び、人事の「後朝」である。しかし「若菜」「菖蒲」「後朝」については、「子日・若菜」、「五日・菖蒲」、「七夕・後朝」と続く配列の密接さゆえと理解できよう。残るは「残雪」と「卯花」だが、とりわけ「卯花」の題は後続する「神祭」との連想からすれば、「葵」の方が似つかわしくさえ感じられる。あるいは、「葵」が第六の草木のうちに配列されているのだから、「卯花」も同様の扱いでよかつたのではないか。にもかかわらず歳時に「卯花」が位置付けられたのは、なぜだろうか。

「卯の花」は空木の花のことである。ユキノシタ科の落葉低木で初夏に白い五弁の花を枝先に付け、通常は山野に自生し、庭園に植えられることも多いとされている。その「卯の花」の表現史については、いくつかの先行研究があるが⁽¹⁾、どちらかといえば、新古今時代の歌風に重きを置く論が多く、『古今六帖』の配列に注目したものは管見の限り見当たらない。一般に『古今六帖』の配列については、『古今集』の配列に大きく影響を受けていることが指摘される⁽²⁾。一方で、『古今六帖』の配列自体が独自の解釈を含むことがつとに指摘されており⁽³⁾、近時は『古今集』『後撰集』以外の原資料として『貫之集』⁽⁴⁾や『重之百首』⁽⁵⁾などの影響も指摘されつつある。

そこで、まずは、当該の『古今六帖』「卯花」の題前後の歌々を見ておくことにする。

春ははや過ぎにしものを鶯の又なく人のこひしきやなぞ

春過ぎて卯月になれば榊葉のときはのみこそしげくなりけれ

うの花

山がつかきほにさける卯の花はたが白妙の衣かけしぞ

昔見し我が故郷は今も猶うの花のみぞめには見えける

うの花のさけるあたりにやどりせじねぬにあげぬとおどろかれけり

けふも又のちもわすれじ白たへのうの花にほふ宿と見つれば

時ならぬ玉をぞぬけるうの花はさ月をまたは久しかるべく

ときわかずふれる雪かと見るまでにかきねもたわにさけるうの花

神まつり

かみまつる卯月にさけるうの花をしるくもきねがしらげたるかな

うの花の色にまがへるゆふしでてけふこそ神をいのるべらなれ

神まつる時にしなれば榊葉のときはのかげはかはらざりけり

神のますもりの下草風吹けばなびきてもみなまつる比かな

表現上は七八番歌に「卯の花」「憂し」の掛詞が見られるほかは、多様な見立てが特徴的である。七七番歌では「白

妙の衣」と、八二番歌では積もった「雪」と、八四番歌では「ゆふ（木綿）」と見立てられる。いずれも「卯の花」

の白さや、柔らかく垂れ下がる姿に注目したものである。七九番歌では夜明けと見紛う明るさが詠まれており、八〇

・八三番歌でも、その白さが注目されている。

それにしても、なぜ「卯の花」は歳時のうちに据えられたのであろうか。「卯の花」歌は、「卯月」の項に二首中〇

首、「卯花」の項に六首中六首、「神祭」の項に四首中二首である。「卯月」から「卯花」の題の連鎖は、八三番歌の

(夏・七五)

(夏・七六・貫之)

(夏・七七)

(夏・七八・躬恒)

(夏・七九)

(夏・八〇・貫之(或本敏行))

(夏・八一)

(夏・八二)

(夏・八三・素性法師)

(夏・八四・貫之)

(夏・八五)

(夏・八六・順)

「かみまつる卯月にさけるうの花」に見られるように、卯の花を卯月の花と見る連想に基づくものであろう。すでに『万葉集』に、「四月一日掾久米朝臣廣繩之館宴歌四首」／宇能花能 佐久都奇多知奴 保等登藝須 伎奈吉等与米余 敷布美多里登母（卷十八・四〇六六・大伴家持）、…… 宇能花乃 佐久月多豆婆 米都良之久 鳴保等登藝須安夜女具佐 ……」（卷十八・四〇八九・大伴家持）と四月を卯の花の咲く月とする意識が認められる。また、時代は下るが藤原清輔『奥義抄』には「波流花さかりにひらくるゆゑに卯のはなづきといふをあやまれり」と「卯月」の語源に「卯の花」の語が想定されている⁽⁶⁾。一方、「卯の花」の後統の題「神祭」は、周知の通り四月の中の酉の日に行われる賀茂祭のことだから、『古今六帖』の配列に即す限りでは、「卯の花」は「卯月」と「賀茂祭」という二様の連想の中に位置づけられることになる。

それでは『古今六帖』の「卯の花」の題以外に収録された「卯の花」歌はどうか。

- ・春さればうのはなくたしわがこえしいもがかきはあれゆかんかも
(第二・「まがき」・一三五二)
 - ・神やまの身をうのはなのほととぎすくやくしとねをのみぞなく
(第四・「ざふの思」・二一八八)
 - ・さくらちりうの花も又さきぬれど心ざしには春夏もなし
(第五・「あひおもふ」・二二六一・貫之)
 - ・時鳥きなきとよますうのはなとともによこしとはましものを
(第六・「ほととぎす」・四四一六)
 - ・ほととぎす我とはなしにうのはなのうきよの中に鳴きわたるらん
(第六・「ほととぎす」・四四三六・躬恒)
- これらでは、「ほととぎす」との組み合わせが目立ち（二一八八・四四一六・四四三六）、「憂し」との掛詞や同音反復が認められる（二一八八・四四三六）ものの、「卯の花」の題のもとに見られた見立て歌の例はなく、賀茂祭との連想もない。

こうした『古今六帖』における「卯の花」歌の特性をどのように理解すればよいのだろうか。以下、『万葉集』以

来の「卯の花」の表現史を辿りつつ考察することにする。

二 「卯の花」の表現史

「卯の花」は、『万葉集』に二四首、『古今集』に二首、『後撰集』に七首、『拾遺集』に九首詠まれている。『万葉集』から『古今集』への用例の激減が注目されよう。

『万葉集』には第一期・第二期に用例がなく、第三期に二首、残りは第四期の用例であることがすでに指摘されている⁽⁷⁾。その中で、表現上の特性を整理すれば、①「ほととぎす」との組み合わせ、②「卯の花」「憂し」の連想、③「卯の花腐し」「卯の花月夜」「卯の花山」といった表現などの点に集約される。

① 霍公鳥 来鳴令響 宇乃花能 共也来之登 問麻思物乎

(卷八・一四七二・石上堅魚、『古今六帖』四四一六)

皆人之 待師宇能花 雖落 奈久霍公鳥 吾将忘哉

(卷八・一四八二・大伴清繩)

宇乃花能 過者惜香 霍公鳥 雨間毛不置 從此間喧渡

(卷八・一四九一・大伴家持)

宇能花毛 未開者 霍公鳥 佐保乃山邊 来鳴令響

(卷八・一四七七・大伴家持)

霍公鳥 鳴音聞哉 宇能花乃 開落岳尔 田葛引媳婦

(卷十・一九四二)

宇能花乃 散卷惜 霍公鳥 野出山入 来鳴令動

(卷十・一九五七)

霍公鳥 鳴峯乃上能 宇能花之 厭事有哉 君之不来益

(卷八・一五〇一・小治田廣耳)

翼之 往来垣根乃 宇能花之 厭事有哉 君之不来座

(卷十・一九八八)

春去者 宇能花具多思 吾越之 妹我垣間者 荒来鴨

(卷十・一八九九、『古今六帖』一三五五・第五句「あれゆかんかも」)

五月山 宇能花月夜 霍公鳥 雖聞不飽 又鳴鴨

(卷十・一九五三)

如是許 雨之零尔 霍公鳥 宇乃花山尔 猶香将鳴

(卷十・一九六三)

『古今六帖』による規範化の一樣相

①の点、「卯の花」と「ほととぎす」との組み合わせを詠んだ歌は、『万葉集』の「卯の花」歌二四首中一八例ある。総じて「ほととぎす」の鳴く折と「卯の花」の咲く折の交錯を通じて初夏のある限られた時期を切り出すもので、「卯の花」は時を刻む指標となっている。これらでは「ほととぎす」との連想のためでもあるうが、一四七七・一九四二・一九五七番歌のように、「山」「野」などとの連想が強い。また②「卯の花」「憂し」の掛詞の萌芽と見られる例も認められる。さらに、③「卯の花腐し」「卯の花月夜」「卯の花山」といった『万葉集』に特徴的な表現が見られ、万葉集時代における「卯の花」の生活への密着が感受される。「卯の花腐し」とは五月雨のことで、「宇能花乎令腐霖雨之始水迹縁木積成將因兒毛我母」(巻十九・四二二七)などと詠まれ、「卯の花」の歳時を刻む指標としての特質が確かめられる。なお、これらの表現は『万葉集』に特徴的で、必ずしも平安和歌には受け継がれず、その影響は院政期を待つことになる⁽⁸⁾。

このような上代における「卯の花」については、民俗学的立場からは農耕儀礼との相関による理解が示されており、いくらかは有効な議論と思われる。折口信夫は「卯の花」「卯月」「卯杖」「卯槌」をいづれも「うつ」に関連するとし、山人が杖で土地を「うち」、土地の精霊を呼び覚ますことで豊作を祈願する、一連の儀礼に関わるものと捉えた⁽⁹⁾。また土橋寛氏は、豊穰の予祝としての花迎えの行事の中でウツギの花を軒にさす風習が水戸や関西に残ることを指摘する⁽¹⁰⁾。後代の『東都歳時記』⁽¹¹⁾や『守貞漫稿』⁽¹²⁾にも、寺院灌仏の折に卯の花を戸外に挿したり、仏前に供える風習が記される。灌仏をそもそも日本固有の春山入りの儀礼に仏教行事が融合して成立したとする説によるならば⁽¹³⁾、「卯の花」は豊作を祈る予祝の行事と近い関係にあったともいえる。「佐伯山 于花以之 哀我 手駕取而者 花散軀」(『万葉集』巻七・一二五九)、「不時 玉乎曾連有 宇能花乃 五月乎待者 可久有」(同、巻十・一九七五、「古今六帖」八二)なども実態的に「卯の花」を挿頭にしたことと関わるのではなからうか⁽¹⁴⁾。『古今六帖』の「卯

花」「神祭」の配列も、こうした習俗を想定すれば解しやすい。

とはいえ、平安時代の諸例には、習俗と強く連想される例は必ずしも多くはない。『古今集』においては「卯の花」の歌は、

郭公我とはなしに卯花のうき世中になきわたるらむ

(夏・一六四・凡河内躬恒、『古今六帖』四四三六)

世中をいとふ山べの草木とやあなうの花の色にいでにけむ

(雑下・九四九・読人知らず)

のわずか二首である。『万葉集』に特徴的だった①「ほととぎす」との組み合わせは一六四番歌に、また、②「憂し」との掛詞は二首ともに認められ、これらは以後の「卯の花」歌の常套的表現となっていく。ここで注目されるのは、『古今集』における「卯の花」歌が夏部と雑下部に入集し、恋部にはない点である。

『後撰集』になると、「卯の花」の表現技法は拡大していく。以下、集中の全例である。

卯花のさけるかきねの月きよみいねずきけとやなくほととぎす

(夏・一四八・読人知らず)

うらめしき君がかきねの卯花はうしと見つつも猶たのむかな

(夏・一五一・読人知らず)

うき物と思ひしりなば卯花のさけるかきねもたづねならまし

(夏・一五二・読人知らず)

時わかずふれる雪かと見るまでにかきねもたわにさける卯花

(夏・一五三・読人知らず、『古今六帖』八二)

白妙ににほふかきねの卯花のうくもきてとふ人のなきかな

(夏・一五四・読人知らず)

時わかず月か雪かとみるまでにかきねのままにさける卯花

(夏・一五五・読人知らず)

鳴きわびぬいづちかゆかん郭公猶卯花の陰ははなれじ

(夏・一五六・読人知らず)

①「ほととぎす」との組み合わせは二首(二四八・一五〇、②「憂し」との連想は三首(二五一・一五二・一五四)に認められる。一方、新たな特徴として、④見立ての技法が確認される。一五三・一五五番歌がそれにあたるが、類歌関係にあるとおぼしい二者の関係は、「雪」との見立てである一五三番歌が先にあり、「雪」と「月」との見立てに焼

きなおした一五五番歌が生まれたものと想定できる。さらに、⑤「垣根」との組み合わせが六首（二四八・一五・一五二・一五三・一五四・一五五）と目だっている。「垣根」との連想といえ、『万葉集』では「卯の花」とともに詠まれる景物としては前述の通り「山」「野辺」が主で、「垣根」の歌は、「春去者 宇乃花具多思 吾越之 妹我垣間者荒来鴨」^{あれけるかも}（巻十・一八九九）、「鶚之 往来垣根乃 宇能花之 厭事有哉 君之不来座」^{うぐくすの かよふかきねの うのはなの うきことあれや きみがきまさぬ}（巻十・一九八八）の二首しかない。従って『後撰集』に顕著に認められる「垣根」との連想は、平安時代の独自の発展と理解できる。

しかし、何よりも特徴的なのは、これらのすべてが夏部に採録されていることであろう。一般に『後撰集』四季部には内容的には恋歌と目されるものも多く含まれており、ここでいえば②の「憂し」と連想される歌々などは、恋歌の要素を感じさせるものである。とはいえ、『後撰集』恋部に「卯の花」の用例がなく夏部に集中するところには、『古今集』を規範とした編纂意識を認めることができる。

では『拾遺集』はどうか。全九例を次に掲げる。

（夏・八〇・源順）

わがやどのかきねやはるをへだつらん夏きにけりと見ゆる卯の花
卯の花をちりにしむめにまがへてや夏のかきねに驚のなく

（夏・八九・平公誠）

うの花のさけるかきねはみちのくのまがきのしまの浪かぞ見る

（夏・九〇・読人しらず）

神まつる卯月にさける卯の花はしろくもきねがしらけたるかな

（夏・九一・凡河内躬恒、『古今六帖』八三）

かみまつるやどの卯の花白妙のみてぐらかとぞあやまたれける

（夏・九二・紀貫之）

山がつかきねにさける卯の花はたが白妙の衣かけしぞ

（夏・九三・読人しらず、『古今六帖』七七）

時わかずふれる雪かと思ふまでにかきねもたわにさける卯の花

（夏・九四・読人しらず、『古今六帖』八二）

郭公かよふかきねの卯の花のうきことあれや君がきまさぬ

（雑春・一〇七一・人麿）

卯の花のさけるかきねのやどりせじねぬにわけぬとおどろかれけり

（雑春・一〇七二・重之、『古今六帖』七九（第二句「さけるあたりに」）

八〇・九一・九二・一〇七二番歌は、屏風歌である。⑤「垣根」との連想が七首（八〇・八九・九〇・九三・九四・一〇七二・一〇七三）と顕著に定着しているが、より特徴的なのは④見立ての拡大である。自然景物との間では、「梅」（八九）、「波」（九〇）、「雪」（九四）と見立てられ、人事との間では「きね」（九二）、「みてぐら」（九三）、「衣」（九三）と見立てられる。一〇七二番歌も含めて、いずれも卯の花の白さに注目したものである。こうした見立ての技法の拡大には、屏風歌や歌合が関わるはずである。

すでに指摘されるように⁽¹⁵⁾、『天徳四年三月卅日内裏歌合』において初めて「卯の花」は歌合の題となっている。

卯花

十二番

左

忠見

道遠み人も通はぬ奥山に咲ける卯の花誰と折らまし

右勝

兼盛

嵐のみ寒き深山の卯の花は消えせぬ雪とあやまたれつつ

左歌山の卯の花をしもおもひけむぞいかが。右歌おなじ山なれどをかしさまされり。仍以_レ右為_レ勝。

判詞は、左歌については山の卯の花である点を難とし、右歌については山の卯の花ではあるが「雪」との見立てに興趣を発見して勝とする。「卯の花」の美質を多様な見立てを通して発見する姿勢といえるが、同時に、ここには平安朝の都市化に従って山野に自生する卯の花と実態的な距離ができたことも関わっているよう。「山がつかきねにさける卯の花」（『拾遺集』九三）など、卯の花は賤しい山人のうちの一点の風雅として位置付けられている⁽¹⁶⁾。野辺や山の景として鍾愛された万葉集時代とは、異なる美の発見である。

再び『拾遺集』「卯の花」歌に話題を戻すならば、見立ての技法の拡大によって、個々の和歌の内部に新たな時間

意識が孕まれるようになった。たとえば八九番歌においては「卯の花」「梅」の見立てを通じて「鶯」のいる夏が詠まれ、「わがやどのかきねははるをへだつらん夏きにけりと見ゆる卯の花」(夏・八〇・源順)などは「垣根」「へだつ」からの連想によって春から夏への季節の変化が詠まれている。こうした、春と夏との境界的景物としての「卯の花」の位置づけは、『古今集』『後撰集』においては夏部に位置していた「卯の花」が、『拾遺集』においては二首(二〇七一・二〇七二)が雑春部に位置付けられることから注目される。

『拾遺集』歌のうち、『古今六帖』入集歌である四首(九一・九三・九四・一〇七二)はいずれも見立ての歌であり、とりわけ九四番歌は『後撰集』にも入集していることから、『拾遺集』における見立てへの格別の鍾愛が察せられる。のみならず、『後撰集』には認められなかった「神祭」との関係を示す歌が二首(九一・九二)入集しているところには、『古今六帖』の影響が顕著に現れているとみてよい。

なお、『拾遺集』では、①「ほととぎす」との組み合わせは一首(二〇七二)、②「憂し」との連想も一首(二〇七一)のみとわずかで、「憂し」との連想は以下の八代集においても多くは見出せない。「卯の花」「憂し」は常套的な掛詞ではあるが、「憂し」との掛詞といえば「浮く」が定番であり、「卯の花」「憂し」の連想は、季節上の制約もあってか必ずしも頻出はしない。『古今六帖』においても「憂し」との連想は、歳時の「卯の花」題の各首のうちにはわずかで、その他の題のうちに散見されるのみである。初夏の明るい情景の中で、「卯の花」『憂し』の連想は、言語遊戯としてはあり得ても、実感としてやはりどこか馴染みにくかったのではなからうか。また、そうした「卯の花」「憂し」の連想関係の縮小傾向には、「卯の花」題を歳時に位置付けるといって『古今六帖』の理解が、力を及ぼしているのではなからうか。「卯の花」はむしろ、『万葉集』以来の「ほととぎす」との連想を核に、見立ての技法を拡大させ、より視覚的な情景美が発見されていった。その結果、人事、とりわけ恋との関連性が薄まり、叙景的な和歌

にふさわしい景物となつていつたと考えられる。

「卯の花」は表現史上、恋の景物としての方向に発展せず、夏の景物として、三代集に、『古今六帖』に位置付けられた。次節では「葵」の表現史を辿りつつ、「卯の花」の位置づけを相対的に炙り出すことにする。

三 「葵」の表現史

「葵」は「卯の花」とは異なり、歳時部の「神祭」の題に隣接しては取り上げられず、第六帖に題を得た。

千はやぶる神のうづきになりけりいざうちむれてあふひかざさん

(第六・三九五二)

おもふなかさけにゑひにし我なればあふひならではやむくすりなし

(第六・三九五二)

の二首が収められている。前者では「うづき」との関連が歌われ、歳時部にもふさわしい印象を受けるが、後者では「あふひ」に「逢ふ日」が掛けられて恋歌の印象がある。

「葵」を詠んだ歌は、『万葉集』に一首、『古今集』に二首、『後撰集』に二首、『拾遺集』に一首と僅少である。『万葉集』では、

成葉なしたの 寸三すさん 粟嗣あはつぎ 延田はくずの 葛乃のちも 後毛あはむと 将相跡あふひはななく 葵花咲

(巻一六・三八三四)

と、すでに「逢ふ日」との連想の萌芽が見られる。しかし、『古今集』では、集中の二首ともに「あふひ、かつら」の題のもとに、

かくばかりあふひのまれになる人をいかがつらしとおもはざるべき

(物名・四三三・読人知らず)

人めゆゑのちにあふひのはるけくはわがつらきにや思ひなされむ

(同・四三四・読人知らず)

と物名部に取り上げられており、その掛詞としての連想性はいまだ斬新だったものと思われる。続く『後撰集』で

は、

賀茂祭の物見侍りける女のくるまにいひいれて侍りける

ゆきかへるやそうじ人の玉かづらかけてぞたのむ葵てふ名を

返し

(夏・一六一・読人知らず)

ゆふだすきかけてもいふなあだ人の葵てふなはみそぎにぞせし

(同・一六二・読人知らず)

の贈答歌が初めて夏部に取り上げられるものの、歌の趣は恋歌そのものである。『拾遺集』以後は夏部からは姿を消し、雑部へと移り(後拾遺集』雑五・一一〇七・一一〇八・一一四一)、夏部での再登場は『詞花集』『千載集』『新古今集』を待つこととなる。こうした「葵」歌採録の部立の変遷は、「卯の花」が『拾遺集』以後、初夏の景物として神祭の行事と関りながら、夏部に確かな位置を占めていくことは対照的である。『拾遺集』では、

我こそや見ぬ人こふるやまひすれあふ日ならではやむくすりなし

(恋一・六六五・読人知らず)

と、『古今六帖』三九五二番歌と下の句を同じくする類歌が取り上げられるが、一層恋歌としての趣を強くするものとなっている。

「葵」『逢ふ日』の掛詞の連想の定着には、もとより『源氏物語』葵卷の存在が強く関与しているに違いない。『堤中納言物語』「ほどの懸想」冒頭なども「葵」『逢ふ日』の連想をもとに形象されたとおぼしい。しかし、それが物語として違和感なく成り立ち得たのは、現実には賀茂祭が人々の出逢いの場であったことと関わるはずである。一般に掛詞については、実態とは無縁であつても同音であれば連想されるという、言語ゲームとしての側面が強調されがちであるが、掛詞として連想される二語が全く無縁なわけではなく、むしろ掛詞となっている相互の言葉が、相互の内実をより豊かに物語る関係になることは少なくない。「葵」『逢ふ日』の連想は、そうした相補的な掛詞とし

て、いかにもふさわしかったと思われる。

「卯の花」と「葵」とはともに「神祭」に縁の深い景物だが、『古今六帖』においては、「卯の花」の題は歳時に、「葵」の題は草木に配列された。「卯の花」は万葉集時代には農耕社会と密着していたとおぼしい山野の景であったが、平安時代に入って「憂し」との連想性を必ずしも強めず、山里の景として、あるいは屏風歌的な人工的叙景に傾斜していった。その一方、「葵」は「逢ふ」との連想から恋の要素を濃厚にしていく。恋の歌語としての可能性を削がれていった「卯花」と、恋歌としての印象を濃くする「葵」と。その二様の系譜は、『古今集』においてその萌芽を孕みつつも、『古今六帖』の配列を通して確認され、規範化され、紡がれていったと考えられる。

四 『枕草子』における『古今六帖』の規範化

『古今六帖』が単なる作歌の手引書であるにとどまらず、物語などを生み出す想像力の源となり、散文叙述の形成に豊かな土壌を提供したことはよく知られている。

たとえば『古今六帖』の題の一つ「いはで思ふ」と『大和物語』一五二段との関係を例に取ろう。一五二段とは、磐手の郡から献上された鍾愛する鷹を逃がしてしまった大納言に対し、帝が「いはで思ふぞいふにまされる」と答えたと、例の物語である。この物語自体、「いはで思ふ」という馴染み深い和歌の表現に着想されて創造されたと考えられるものだが、物語は最後に「これをなむ、世の中の人、もとをばとかくつけける。もとはかくのみなむありける」と語る。もともと下句のみで上句は流動的であり、多数の類歌があったという趣旨である。一般に類歌は下句の感情表現が共通することが多いから、そのことを明瞭に物語る証左として、まことに興味深い。

この同じ「いはで思ふ」については、『枕草子』「殿などのおはしまさで後」の段にも言及がある。ここでは、定子

が山吹の花びらに「言はで思ふぞ」と書いて清少納言への情愛を示したのに対して、上句がすぐさま思い出せない清少納言が周囲の女房に教えられて「心には下ゆく水のわきかへり」という上句を思い出すという展開であり、あたかも「心には」の上句が固定的であるかのように語られる。しかし、これは「心には下ゆく水のわきかへり」は思ふぞいふにまされる」という上句が固定化された形で流布していたことの証とは限らない。この歌は『古今六帖』「いはでおもふ」の題の冒頭に掲げられる一首であり、すなわち『枕草子』の『古今六帖』受容とも考えられるからである。

『枕草子』が『古今六帖』を規範としていたことについては、ことに近時指摘が相次いでいる⁽¹⁷⁾。いま一つ例を挙げれば、『枕草子』の「虫は」の段において、「虫は 鈴虫。蛸。蝶。松虫。きりぎりす。はたおり。われから。ひをむし。蛭」と列挙し、続く「蓑虫」「額づき虫」「蠅」「夏虫」「蟻」についてやや詳しく言及する形は、『古今六帖』「虫」の項で「虫・蟬・夏虫・蟋蟀・松虫・鈴虫・蛸・蛭・機織女・蜘蛛・蝶」といった題が列挙されることと無縁ではない⁽¹⁸⁾。

それでは『枕草子』における「卯の花」について検討したい。

A 祭りのかへさ見るとて、雲林院、知足院などの前に車を立てたれば、郭公も忍ばぬにやあらむ、鳴くに、いとようまねび似せて、木高き木どもの中にもろ声に鳴きたるこそさすがにをかしけれ。郭公は、なほさらに言ふべき方なし。いつしかしたり顔にも聞えたるに、卯の花、花橘などに宿りをして、はたかくれたるも、ねたげなる心ばへなり。

(鳥は)

B 卯の花のいみじう咲きたるを折りて、車の簾、かたはらなどにさしあまりて、おそひ、棟などに、長き枝を葺きたるやうにさしたれば、ただ卯の花の垣根を牛にかけたるぞと見ゆる。……(中略)……一条殿より傘持て来たるをささせて、うち見返りつつ、こたみはゆるめると物憂げにて、卯の花ばかりを取りておはするものをかし。……(中略)……げにと思ふに、いとわびしきを、言ひ合はせなどするほどに、藤侍従、ありつる花につけて、卯の花の薄様に書きたり。……

〔五月の御精進のほど〕

C 是るかげに言ひつれど、ほどなく還らせたまふ。扇よりはじめ、青朽葉どもの、いとをかしう見ゆるに、所の衆の、青色に白襲をけしきばかりひきかけたるは、卯の花垣根近くおぼえて、郭公も陰に隠れぬべくぞ見ゆるかし。……（中略）……内侍の車などのいとさわがしければ、異方の道より帰れば、まことの山里めきてあはれるなるに、うつぎ垣根といふものの、いと荒々しく、おどろおどろしげにさし出でたる枝どもなおほかるに、花はまだよくもひらけ果てず、つばみたるがちに見ゆるを折らせて、車のこなたかなたにさしたるも、かつらなどのしほみたるがくちをしきに、をかしうおぼゆ。〔見物は〕

『枕草子』では「卯の花」は賀茂祭との連想が強い。A・Cともに「祭のかへさ」の折である。「祭のかへさ」とは、賀茂祭の翌日に斎王が上社から斎院御所へと帰るための華やかな行列をなすもので、人々は見物に出かけた。B「五月の御精進のほど」の段も五月初の頃とはいえ、「道も、祭のころ思ひ出でられてをかし」とあつて、あくまで賀茂祭の折の景と重ねられた描写なのである。そのほかの表現上の特徴としては、①「ほととぎす」との連想も目立っている。A「鳥は」の段では「郭公」からの連想として「花橘」とともに取り上げられ、Bも、一日からの五月雨がちの折に「郭公の声たづねに行かばや」と始まる。C「見物は」の段でも「郭公」の声と不可分に描かれている。また、⑤「垣根」との関係も、「卯の花の垣根」（「五月の御精進のほど」）、「うつぎ垣根」（「見物は」）などと明らかに意識化されている。

このように「卯の花」を、日常の生活の中の景としてではなく「山里」の景と見做して「垣根」「郭公」との連想の中で描出するところは、『後撰集』から『拾遺集』に形成された歌ことばの連想性とはほぼ合致するが、何より、賀茂祭にまつわって「卯の花」が描出されるところには、『古今六帖』の「卯の花」題の位置付けの呪縛のうちにある。ちなみに「卯の花」は三巻本では「木の花は」の段には採録されないが、能因本には言及がある。

D 藤の花、しなひ長く、色よく咲きたる、いとめでたし。卯の花は、品おとりて、何となけれど、咲くころのをかしう、郭公の

陰に隠るらむ思ふに、いとをかし。祭のかへさに、紫野のわたり近きあやしの家ども、おどろなる垣根などに、いと白う咲きたるこそをかしけれ。青色の上に、白き單襲かづきたる、青朽葉などにかよひて、なほいとをかし。四月のつごもり、五月ついたちなどのころほひ、橘の濃く青きに、花のいと白く咲きたるに、雨の降りたるつとめてなどは、世になく心あるさまにをかし。⁽¹⁹⁾

「藤の花」と「橘」との間に「卯の花」が取り上げられ、「郭公」「祭のかへさ」「垣根」といった、前掲の『枕草子』中の用例 A・B・C と類似の連想が認められる。この「卯の花」の項を含む D 「木の花は」本文は元来の形ではなく後の増補とされ⁽²⁰⁾、首肯されよう。

平安朝の物語や仮名日記においては、「卯の花」は必ずしも頻出する景物ではなかった。「卯の花」の用例は、『伊勢物語』『大和物語』『紫式部日記』『和泉式部日記』『更級日記』などには見出せず、わずかに『蜻蛉日記』に六例の用例が認められるだけである。以下、それらの用例を記号を付しつつ紹介するならば、E 「三月のつごもりがた」に雁の卵を生絹の糸で結んでは括って十ずつ重ね、「九条殿の女御殿の御方（藤原師輔女息子）に贈った際に、卯の花に付けたという例（上巻・康保四年三月）のほか、F 道綱と大和だつ人との贈答に言及されたのち、「つごもりになりぬれど、人は卯の花の陰にも見えず、おとだになくて果てぬ」（下巻・天禄三年四月）、と「ほととぎす」に擬せられた兼家の訪れのないことを怨む例がある。ここでは、同月の「祭のかへさ」の叙述の箇所には「卯の花」への言及は見られない。G 兼家の異母弟遠度の、道綱母の養女への求婚とその破局の折、遠度と道綱母との贈答歌に、「なげきつつ明かし暮らせばほととぎすみのうのはなのかげになりつつ」「かげにしもなどかなるらむうの花の枝にしのはぬ心とぞ聞く」（下巻・天延二年五月）とあり、「卯の花」「憂し」の掛詞を通した応酬となっている。H 卷末歌集に「歌合に、卯の花、／卯の花の盛りなるべし山里のころもさほせるをりと見ゆるは」とあり、「山里」との連想がある一

方、「垣根」とは連想がない。

これらを通してみると、まず、「卯の花」が四月に限定されていない点や、①「ほととぎす」との連想は見られるものの、賀茂祭との連想は欠落し、②「卯の花」「憂し」の連想が認められる一方、⑤「垣根」との連想は欠落している、といった特徴が見て取れる。ここには、『古今六帖』歳時「卯の花」題を規範とした呪縛は感じられず、『古今六帖』「卯の花」題以外に入集した「卯の花」歌と類似する表現性、すなわち、『古今集』における「卯の花」の扱いから逸脱していない。『蜻蛉日記』と『古今六帖』の相関については、その影響関係も指摘されている⁽²⁾ものの、「卯の花」に関する限り『枕草子』に顕著に見られるような『古今六帖』の影響力は感受できない。

その一方、『源氏物語』には「卯の花」の用例は一例しかない。少女巻、光源氏の六条院の完成を物語り、夏の町にあたる北東の町の描写の中に、「前近き前栽、呉竹、下風涼しかるべく、木高き森のやうなる木ども木深くおもしろく、山里めきて、卯花の垣根ことさらにしわたして、昔おほゆる花橘、撫子、薔薇、くたになどやうの花のくさぐさを植えて、春秋の本草、その中にうちまぜたり」(③七九頁)とあるのがそれである。ここでは、「憂し」などの心情語との連想は微塵もなく、あくまで叙景的に用いられている。用例がわずかであるのも、恋と自然の二元的世界を仮構する『源氏物語』の美意識には馴染みにくかったためであろうか⁽⁴⁾。「葵」の『源氏物語』中での扱いとはきわめて対照的である。

このように『蜻蛉日記』と『源氏物語』とを見比べた上で『枕草子』における「卯の花」の扱いを考えれば、『枕草子』が『古今集』それ自体ではなく、『古今六帖』を規範としていることが、明らかに認められよう。そのことは、『蜻蛉日記』成立と『枕草子』成立との間の時期に、『古今六帖』の成立、ないしはその爆発的な流布の時期の想定を可能にするともいえる⁽⁵⁾が、むしろ単なる成立時期の問題に還元し得ない、『枕草子』の『古今六帖』受容の独

自性を見出す方が生産的である。『枕草子』は『古今六帖』をその章段形成の着想の種としてとりわけ意識したとおぼしく、そのような『枕草子』における『古今六帖』受容は、『古今集』の正典化に積極的に参与していった『源氏物語』⁽²⁴⁾における『古今六帖』受容とは別種の次元で果たされ、それぞれの表現世界が形成されたと考えられる。

注(1)

本田義彦「万葉・勅撰『卯の花』考」(澤瀉博士喜寿記念 万葉学論叢 一九六六年、津村正「卯の花」の和歌史——平安朝和歌史の微視的素描——」(『文学史研究』二五、一九八四年十二月)、竹下豊「万葉表現の行方——『卯の花』に関して——」(『国語と国文学』一九九一年八月)、佐藤明浩「『卯の花月』の歌」(『古代中世文学研究論集 第一集』一九九六年十月) など。

(2) 平井卓郎「古今和歌六帖の研究」(明治書院、一九六四年)

(3) 平田喜信「作品としての古今和歌六帖——古今集との関係をめぐって——」(『横浜国大 国語研究』三、一九八五年三月)

(4) 田中登「古今六帖の貫之歌」(『平安文学研究』六三、一九八〇年七月)、青木太朗「『古今和歌六帖』の出典をめぐって——『貫之集』との比較を通して——」(『和歌文学研究』七一、一九九五年十二月)

(5) 青木太朗「『古今和歌六帖』と『重之首百』——『六帖』の撰集資料をめぐって——」(『横浜国大 国語研究』一五、一九九七年三月)

(6) 『日本歌学大系 第一卷』(風間書房、一九五七年)

(7) 『万葉の歌ことば辞典』(有斐閣、一九八二年)

(8) 注(1)竹下論文。

(9) 折口信夫「花の話」(『折口信夫全集 2』中央公論社、一九九五年)

(10) 土橋寛「古代歌謡と儀礼の研究」(岩波書店、一九六五年)

(11) 斉藤月岑、一八三八年。(『東都歳時記』『日本図会全集 第六回』日本随筆大成刊行会、一九二八年)

(12) 喜田川守貞、一八五三年。(『守貞漫稿 中巻』東京堂出版、一九七四年)

(13) 和歌森太郎『年中行事』（至文堂、一九五七年）、鈴木棠三『日本年中行事辞典』（角川書店、一九七七年）

(14) 『万葉集全注』で渡瀬昌忠は一二五九番歌について、「初夏のころ、卯の花をかざす歌垣で女を得ようとする時の、男の歌」とする。一九七五番歌については、土屋文明『万葉集私注』は「卯の花をかざしに折りたいが、その咲く五月を待ったのでは、時が久しくなるから、季節にかかはらない玉を貰いて、かざしとして居るとの意」とする。ちなみに住吉大社の住吉卯祭では、卯の花で挿頭や玉串を作るといふ（『図説俳句大歳時記』（角川書店、一九六四年）「卯の葉の神事」の項）。

(15) 岸上慎二「卯の花」（『大歳時記』集英社、一九八九年）

(16) 注(1)津村論文。

(17) 藤本宗利『枕草子研究』（風間書房、二〇〇二年）所収の諸論、西山秀人「枕草子類聚章段における古今和歌六帖の受容——地名章段を中心に——」（『古代中世文学論考 第二集』新典社、一九九九年）など。

(18) 藤本宗利「虫は」における伝統性と獨創性（初出『日本の美学』六、ぺりかん社、一九八五年十月、『枕草子研究』風間書房、二〇〇二年）

(19) 日本古典文学全集『枕草子』（小学館、一九七四年）

(20) 萩谷朴『枕草子解環 一』（同朋舎出版、一九八一年）

(21) 品川和子「蜻蛉日記の方法と源泉——古今六帖との関連についての二、三の問題——」（『学苑』三三五、一九六七年一月）

(22) 大島本ではいま一例、「かの一条の宮にも、常にとぶらひきこえたまふ。卯月ばかりの卯の花は、そこはかとなうこちよげに、ひとつ色なる四方の梢もをかしう見えわたるを」（『柏木巻』が認められる。

(23) 近藤みゆき「古今和歌六帖の歌語——データベース化によって見た歌語の位相——」（『歌ことばの歴史』笠間書院、一九八八年）は、『古今六帖』の成立を、上限が貞元元（九七六）年、下限がa永観元（九八三）年、b永延元（九八七）年の二説があると整理した上で、『古今六帖』の語彙の検討から、所収歌の年時からの推定によった従来の考え方に修正を迫り、形をなしたのちの増補も含めた柔軟な理解を求めている。

(24) 秋山虔「玉鬘をめぐつて」（初出『文学』一九五〇年十二月、『源氏物語の世界』東京大学出版会、一九六四年）、同「み

『古今六帖』による規範化の一樣相

『古今六帖』による規範化の様相

110

やび」の構造」(『講座日本思想 第五卷 美』東京大学出版会、一九八四年)、高木和子「玉鬘十帖論」(初出『源氏物語
試論集 論集平安文学4』勉誠社、一九九七年九月、『源氏物語の思考』風間書房、二〇〇二年)

※『万葉集』は『万葉集 本文篇』(塙書房、一九六三年)、『古今六帖』・八代集は新編国歌大観、『蜻蛉日記』『枕草子』『源
氏物語』は小学館新編日本古典文学全集、歌合は『平安朝歌合大成』に拠ったが、私意により改めたところがある。

(たかぎ かずこ・関西学院大学文学部助教授)